

戦争体験が教育への情熱を育む

吉田 少し話を広げまして、先生が漢字教育に取り組もうとしたきっかけとか、あるいはそれをやっていかなければならないという使命感とか、そういうものがどういうふうにして発展してきたかということ伺いたいわけですが……。

石井 私は大学を出ると最初は学者になるつもりでした。しかし戦争中でしたから学問ができないで半年繰上げ卒業ということで、すぐに戦場へ出されました。当時のだれもが考えたように、国のために身をささげるということに、道を見出すよりしようがなかったわけです。それで、終戦までに、いくたびか死ぬ可能性の多いような場面にぶつかったわけですが、結局終戦まで生きながらえました。

そしてその時、この敗戦を立て直すのに役立つということが、自分よりも先に死んでいった戦友たちに報いる道じゃないかということで、考えたのがやはり教育だと思ったわけなんです。そしてこの道でとにかく立て直さなければならぬ。それこそ石に

かじりついてでも、日本を立て直さなければならぬと考えました。最初母校の高等学校へ勤めたわけなんです。そして昭和 24 年に中学教師になりました。そこではじめて小学校からはいつてきたばかりの中学生を実際に指導して、学力が非常に低いのに驚きました。ことに読み書き能力がそうなんです。それで、中学へ行きまして、いちばん先にした調査が、数学と社会科と理科の教科書に用いられている重要な言葉を、百語ずつ選びまして、それをテストしてみたら、半分しか読めないんですね。

これは小学校教育から考え直さなければならぬということ、そのときに感じました。ところが、ちょうどそのころ教育委員会制度ができあがりまして、私は八王子におりましたから、八王子の教育委員会ができたその最初の指導主事にならないかという話があったものですから、これも一つの勉強だと思ひまして、それで昭和 26 年に指導主事になりそれ以後小学校教育にたずさわるようにになりました。

吉田 普通ほかの教科の字が読めないとかなんとかわれると、国語教師のせいだなどといわれて、国語の先生はいっしょうけんめ

い書き取りばかりやらせる。そのところへ追い込まれると、結局生徒も書き取りばかりではいやなわけですから、うまくいかなくなって、おたおたするのが普通なんです。そのとき先生は、下からくる小学校の段階が大事だというふうに考えられて下へおりにいかれたというのが、教育的に考えて非常におもしろいですね。

さて、それでずっと長い間教育の をおやりになっている場合に支えになっているのは、日本の教育をよくしなければならぬ、そして、学問のほうも学問のほうでやらなければならぬんですけれども、同時に教育がなければ、学問というものも成り立たないとお考えになったわけですか。

石井 学問もなり立たないし、たとえば現在のように幼児教育で漢字をやりますと、よくいわれることは、幼児に対してはもっとすべきことがあるのではないかと、たとえば情操教育だとか、道徳教育だとか、社会教育だとかと、いろいろなことを言うわけです。しかし、やはり基本は日本語というものを正しく理解し、その日本語を正しく盛るところの器である漢字というものの理解を、深めなけれ

ば、情操教育でも、道徳教育でもなんの教育でも成り立たない。そういうように私は考えるわけです。

吉田 昔の教育だと、読み書きというのと経験というのを分離して考えているわけですね。経験をやれば読み書きができなくなる。読み書きをやれば経験のほうがおろそかになるというふうに考えていたわけですがけれども、実際はそうでなくて、経験というものも言葉があるから経験ができるので、ただなにかしているというんでは、経験にならないという問題ですね。その点は心理学では最近非常に気がついてきましたね。やはり言葉というものが媒介になるんだと。もちろん字だけではありませんけれども、全体の話し言葉を含めて、言葉というものなしで経験しても、から回りになってしまう。そういうことを実際にやるなかで気がつかれたということですね。